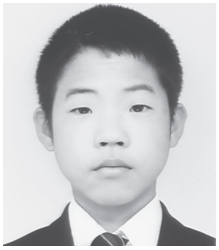
『僕　の　剣　道』



山口県
新川少年剣友会
中学１年　　有　田　匠之輔

「約束が守れないならやめろ。」
父が道場の名簿を持ってきて、館長先生にやめると電話するように言ってきた。少し練習をさぼっただけでひどい話だと思った。

僕は学校や他の習い事で忙しくて稽古に行けないことがたくさんある。その代わり、家で素振りをすることが大事だと父からは言われている。だが、その時は習い事もないのに稽古に行かず、家での素振りを何日もしなかった。

僕が

「自分の事は自分で決める。」
と父に言うと、四日後にある試合にも自分で行くように言われた。だから、ネットでどうやって試合会場まで行くのか調べようとしたが、わからない。母に調べてもらうと、開会式に出る為には泊りがけでないと間に合わないことが分かった。自分一人で行くことができないのだ。僕は愕然。

僕は小学一年から剣道を習っている。今まで、山口県内だけでなく、佐賀県や福岡県や鳥取県など、いろいろな所に試合に行っている。もちろん試合に出るのは、自分の力だと思っていた。しかし実際は、父が練習や試合に全て連れて行ってくれたから、試合に出ることができた。

「基本がなってない。持ち方、姿勢、館長先生の姿勢を思い出せ。」
と、父はいつも僕に言う。稽古の時や試合の時に、時々ビデオにとって僕の姿勢等を見ている。勝った試合でも姿勢が悪いなどいろいろと言われる。勝ったのに文句を言われるのは腹が立つし、未経験者の父に言われたくないとよく思う。

でも、それは僕の心の弱さ、甘えだったのだ。少しくらいさぼってもいいじゃないかという心の弱さ。そして、自分の動きや技の入り方、声の出し方が納得のいくものでなくても、勝てばそれでいいという傲慢な心。それは全て自分に対する甘えからくるものだったのだ。

僕は防具を試合会場に忘れて帰ったことがある。竹刀が割れたまま、試合に出ようとして、夜中に父に起こされ、他の竹刀を準備した苦い思い出もある。常日頃から、剣道をする上で、防具を揃えたり防具の点検はとても大切だと頭では分かっている。だが、面倒だと思うことも時々あり、その結果起こったことだった。このことは、剣道だけでなく、自分の身の回りのものを大事にすることに繋がるのではないかと思った。

また、僕にはあこがれの先輩剣士がいる。時々先輩の引き面を真似して、自分でできるかどうか試したりしている。摺り足、素振り、打ち込み等いろいろあるが、「自分がこう打ちたい。」という理想を持つことで、それが先々の僕の剣道に繋がるのではないだろうか。先生をお手本とし、相手剣士の良さに気づくことで、自分の苦手なところをどのように稽古するか、考えなければい

けない。そして、それを最終的には試合の会場で確かめる。このことが僕に必要なことではないだろうかと考えた。

　試合前になると、先生が

「打って反省、打たれて感謝。」

「稽古場でできないことは試合でもできない。」

ということを話される。この中で、「学校のテストも、授業でわからなければ解けない。」と話されたことがある。

　僕はこのことを思い出しハッとした。剣道を学ぶことは、日常の生活や勉強に繋がっていると先生はおっしゃったのだ。日常生活をきちんと正しく暮らすことが、剣道を学ぶ上で大切だと改めて気付かされた。だから、人生の先輩として、父は僕をサポートして助言してくれていたのだ。

　僕は、剣道で学んでいることを大切にして、自分に甘えない心をもとうと心に誓った。